

## 洋13-26

### 「汚れなき祈り」 ★★★

2013 (平成25) 年2月18日鑑

賞<角川映画試写室>

監督・脚本・製作：クリスティアン・ムンジウ

原案：タティアナ・ニクレスク・ブラン

ヴォイキツァ/コスミナ・ストラタン

アリーナ/クリスティナ・フルトゥル

司祭/ヴァレリウ・アンドリウツァ

修道女長/ダナ・タパラガ

2012年・ルーマニア、フランス、ベルギー映画・152分

配給/マジックアワー

#### <カンヌで女優賞、脚本賞をダブル受賞だが・・・>

本作は、2012年の第65回カンヌ国際映画祭で女優賞と脚本賞をダブル受賞したルーマニア映画。しかもその監督は、『4ヶ月、3週と2日』（07年）を引っ下げて2007年の第60回カンヌ国際映画祭でルーマニア初のパルムドール賞（最高賞）に輝いたクリスティアン・ムンジウだから、注目度は高い。『4ヶ月、3週と2日』は、第61回ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した『ヴェラ・ドレイク』（04年）（『シネマルーム8』335頁参照）と同じく「人工妊娠中絶問題」をテーマにしたもので、その時代背景は1980年代のチャウシェスク独裁政権末期だったから、全編を通じて緊張感いっばいのすばらしい問題提起作に仕上がっていた（『シネマルーム18』334頁参照）が、さて本作は？

#### <題材は、「ルーマニアの悪魔憑き事件」>

クリスティアン・ムンジウ監督が本作で描いたのは、2005年6月にルーマニアのモルドヴァ地方で発生した「ルーマニアの悪魔憑き事件」。これはモルドヴァ地方にある聖三位一体修道院で行われた悪魔祓いの儀式の中で、ドイツから一時的にルーマニアに帰国してきていた23歳の女性アリーナが死亡した「ルーマニアの悪魔憑き事件」で、「現代のエキソシズム事件」として世界中の注目を集めたい。裁判の中で司祭（神父）は「宗教的行為として全く正しかった」と主張したが、結局、神父や修道女長には有罪判決が下されたい。このような宗教がらみの事件は日本人にはなじみが薄いですが、さてクリスティアン・ムンジウ監督は「そんなネタ」からいかなる問題提起を？

#### <ストーリー展開はわかりやすいが・・・>

映画は冒頭、孤児院時代からの親友である若い女性アリーナ（クリスティナ・フルトゥル）とヴォイキツァ（コスミナ・ストラタン）が再会を果たし、今は修道女になっているヴォイキツァがアリーナを修道院に連れて行くシークエンスから始まる。これがプレスシートのストーリー紹介の中で①「アリーナの帰郷」と題されている章で、以降②「最初の発作」、③「入院」、④「罪を知ること」、⑤「予兆」、⑥「里親の家で」、⑦「アリーナの中の悪魔」、⑧「悪魔祓い」、⑨「ヴォイキツァの迷い」、⑩「丘を越えて」と進んでいくから、ストーリーはわかりやすい。

しかし、「アリーナの中の悪魔」が暴れ始めるまでは、修道院を舞台として淡々とストーリーが進んでいくだけだから、それにずっと付き合っていくのは正直、少ししんどくなってくる。しかも、2時間32分の長尺ながら、本作は司祭（ヴァレリウ・アンドリウツァ）と修道女長（ダナ・タパラガ）らが、警察の車に乗せられて連行されるところで終わるから、スクリーン上で長々と見てきたこの事件が今後どのように裁かれていくのか、という私にとって興味深いストーリーは全然描かれていない。つまり、本作はどちらかというと「ルーマニアの悪魔憑き事件」をドキュメンタリー風に描く2時間32分の「大作」になっているわけだ。

#### <クリスティアン・ムンジウ監督の狙いは？>

プレスシートのイントロダクションには、「本作は、2005年にルーマニアの修道院で実際に起きた『悪魔憑き事件』を基に、互いに深い絆で結ばれていたはずの幼なじみ二人が、信仰と愛のはざままで引き裂かれてしまう悲劇を描いたヒューマンドラマ」と書かれている。また、「慈悲ある修道院で、なぜこのような事件が起きたのか」について、クリスティアン・ムンジウ監督は「宗教の名のもとに繰り返される過ちを、我々は決して忘れてはならない」と語っている。しかし、同時に本作は決して監督のその立場を観客に押しつけてはいない。「ルーマニアの悪魔憑き事件」はあくまで題材であり、クリスティアン・ムンジウ監督はそれをフィクションとして監督流の脚本でスクリーン上に描き出したものだ。

しかし、この事件は刑事裁判になったのだから、法廷の場で考えられる限りのさまざまな意見や主張が展開されたはず。したがって、少なくとも私にはそれらを見せてもらわなければ、「ルーマニアの悪魔憑き事件」について自分の意見をまとめるのは、ルーマニア正教会や聖三位一体修道院等についての知識が乏しいこともあって、かなり難しい。本作を観終わった後、何となくストレスがたまったのは、そんな物足りなさのせいかも？

2013 (平

成25) 年2月20日記